

*Oshiro*

Excerpts from "Fuehrer Conferences - German Navy 1940"

Evaluation of the Mediterranean Situation

\*\*\*\*\*

The Italian offensive against Greece is decidedly a serious strategic blunder; in view of the anticipated British counteractions it may have an adverse effect on further developments in the Eastern Mediterranean and in the African area, and thus on all future warfare.

The enemy clearly has supremacy in the eastern Mediterranean at present, and it is possible that his position in the Eastern Mediterranean area will become so consolidated that it will no longer be possible to drive the British Fleet from the Mediterranean.

2. The Naval Staff is convinced that the result of the offensive against the Alexandria-Suez area and the development of the situation in the Mediterranean, with their effects on the African and Middle Eastern areas, is of decisive importance for the outcome of the war.

\*\*\*\*\*

4. Deductions:

\*\*\*\*\* b. The Italian armed forces have neither the leadership nor the military efficiency to carry the required operations in the Mediterranean area to a successful conclusion with the necessary speed and decision. A successful attack against Egypt by the Italians alone can also scarcely be expected now. The Italian leadership is wretched. They have no understanding of the situation; above all they have not yet perceived in what manner their offensive against Greece primarily damages Italy's powers of endurance. Any opposition offered by the Italian Armistice Commission must be overruled. (Recently it requested disarmament of Oran and Bizerts, while Germany wishes to strengthen France in North Africa.)

\*\*\*\*\*

The Naval Staff therefore considers the following necessary:

(1) The German leaders responsible for the conduct of the war must in future plans take into account the fact that no special operational activity, or substantial relief or support, can be expected from the Italian armed forces.

(pages 50-1-2)



J. Williams.  
J. Ninomiya

辯護側書類第二千八百十五号のE

「總統會議 一九九百四十年 獨逸海軍

「~~對英~~」より「拔萃」。

地中海の情勢の評價

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

伊太利の對希臘攻勢は ~~漸進~~ 漸進 重大なる戰略

的錯誤のある、豫想した英心の反撃手

に鑑みるとこの攻勢が東部地中海並に

2209



一私の姓名は島津久<sup>シマヅ</sup>大明治三十九年（一九〇六年）東京都に生れ、昭和五年東京帝國大學卒業直ちに外務省に入り、爾來外務本省及在外公館に勤務、各種の外交事務に従事し昭和十八年（一九四三年）八月在ビルマ日本大使館一等書記官兼任ラングーン總領事に任ぜられ昭和二十年（一九四五年）四月下旬日本軍及在留日本人がラングーンを撤退するに至る迄ラングーンに勤務した、此の期間に於ける私の主たる職務は大使館書記官としてビルマ國外務省と連繫をとり總領事としてビルマ在留日本人の權益を保護することにあつた

二木村兵太郎陸軍大將は昭和十九年（一九四四年）九月中旬ビルマ方面軍司令官として着任したが同大將は日緬間の融和親善意思の疏通民生の安定に非常の關心を拂ひ屢々緬甸要人と會見し腹藏なき意見の交換を遂げ私も此の種の會合に陪席し其の實狀をよく承知してゐる

三以上の具体的事例としては昭和十九年（一九四四年）十一月十八日廿日及廿二日の三回に亘り同大將がビルマ政府各大臣及最高法院長



アフリカ方面に於ける今後の戦争の進展に

又此は将来の全戦局に於て不利

を齎すかも知れない。

自下の所

敵は此かに東部地中海を支配してゐる。そこ

敵の東部地中海に於ける地帯が攻奪國とな

つて英艦隊を地中海から驅逐する事か

最早出来なくなるやも保た難い。

2. 海軍の幕僚はアレキサンドリヤ、スエズ



地域に於ける攻勢及び地中海の情勢の進

展の結果はそのアフリカ及び中東地域に

及ぼす影響と共、戦局に決定的な重

大いあると確信こそある。

\*\*\*\*\*

#### 4. 推断

\*\*\*\*\*  
口、伊太利軍は地中海方

面に於ける所要作戦を必要の速さで



一私の姓名は島津久<sup>シマヅ</sup>大明治三十九年（一九〇六年）東京都に生れ、昭和五年東京帝國大學卒業直ちに外務省に入り、爾來外務本省及在外公館に勤務、各種の外交事務に従事し昭和十八年（一九四三年）八月在ビルマ日本大使館一等書記官兼任ラングーン總領事に任ぜられ昭和二十年（一九四五年）四月下旬日本軍及在留日本人がラングーンを撤退するに至る迄ラングーンに勤務した、此の期間に於ける私の主たる職務は大使館書記官としてビルマ國外務省と連繫をとり總領事としてビルマ在留日本人の權益を保護することにあつた

二木村兵太郎陸軍大將は昭和十九年（一九四四年）九月中旬ビルマ方面軍司令官として着任したが同大將は日緬間の融和親善意思の疏通民生の安定に非常の關心を拂ひ屢々緬甸要人と會見し腹藏なき意見の交換を遂げ私も此の種の會合に陪席し其の實狀をよく承知してゐる

三以上の具体的事例としては昭和十九年（一九四四年）十一月十八日廿日及廿二日の三回に亘り同大將がビルマ政府各大臣及最高法院長



又乍要通り片附けの勝利に導きかけ

の指導力も軍事的能力も有らぬ。

伊太利はかけどころ埃及に非ざる有致

の攻勢も又今は殆ど當らぬ出来ぬ。

伊太利の指導力は~~限有る~~ <sup>きつめ</sup> 有らぬ。

彼等は何等情勢を解してゐない。就中

彼等は<sup>未だ</sup> 彼等の対希臘攻勢が如何なる

風に 伊太利の耐久力を根本的に損

傷するが認め居らぬ。伊太利休戦



一私の姓名は島津久<sup>ヒサ</sup>大明治三十九年（一九〇六年）東京都に生れ、昭和五年東京帝國大學卒業直ちに外務省に入り、爾來外務本省及在外公館に勤務、各種の外交事務に従事し昭和十八年（一九四三年）八月在ビルマ日本大使館一等書記官兼任ラングーン總領事に任ぜられ昭和二十年（一九四五年）四月下旬日本軍及在留日本人がラングーンを撤退するに至る迄ラングーンに勤務した、此の期間に於ける私の主たる職務は大使館書記官としてビルマ國外務省と連繫をとり總領事としてビルマ在留日本人の權益を保護することにあつた

二木村兵太郎陸軍大將は昭和十九年（一九四四年）九月中旬ビルマ方面軍司令官として着任したが同大將は日緬間の融和親善意思の疏通民生の安定に非常の關心を拂ひ屢々緬甸要人と會見し腹藏なき意見の交換を遂げ私も此の種の會合に陪席し其の實狀をよく承知してゐる

三以上の具体的事例としては昭和十九年（一九四四年）十一月十八日廿日及廿二日の三回に亘り同大將がビルマ政府各大臣及最高法院長



委員會の行ふ方針は向ひも壓倒せ

なければならぬ。(近頃伊太利休戰委員會

は、獨逸が北アフリカで佛蘭西を強くこ

度がつておるのに、オランダ及びベルワの

武装解除を要求したのがある。

\*\*\*\*\*

軍令部

故に海軍幕僚は下記を必要なりと

思惟す、即ち



一私の姓名は島津久<sup>シマヅ</sup>大明治三十九年（一九〇六年）東京都に生れ、昭和五年東京帝國大學卒業直ちに外務省に入り、爾來外務本省及在外公館に勤務、各種の外交事務に従事し昭和十八年（一九四三年）八月在ビルマ日本大使館一等書記官兼任ラングーン總領事に任ぜられ昭和二十年（一九四五年）四月下旬日本軍及在留日本人がラングーンを撤退するに至る迄ラングーンに勤務した、此の期間に於ける私の主たる職務は大使館書記官としてビルマ國外務省と連繫をとり總領事としてビルマ在留日本人の權益を保護することにあつた

ニ木村兵太郎陸軍大將は昭和十九年（一九四四年）九月中旬ビルマ方面軍司令官として着任したが同大將は日緬間の融和親善意思の疏通民生の安定に非常の關心を拂ひ屢々緬甸要人と會見し腹藏なき意見の交換を遂げ私も此の種の會合に陪席し其の實狀をよく承知してゐる

三以上の具体的事例としては昭和十九年（一九四四年）十一月十八日廿日及廿二日の三回に亘り同大將がビルマ政府各大臣及最高法院長



(1) この戦争の處理に責任を有する獨逸

の指導者達は、何等特殊の作戦的

活動又は大なる救ひや支援を、伊太利

軍からあつて出まなかつた事を、今後

の計畫中に勘定に入らぬと主張せられた

ならぬ。

(第五十一—二頁)



一私の姓名は島津久<sup>シマヅヒサカ</sup>大明治三十九年（一九〇六年）東京都に生れ、昭和五年東京帝國大學卒業直ちに外務省に入り、爾來外務本省及在外公館に勤務、各種の外交事務に従事し昭和十八年（一九四三年）八月在ビルマ日本大使館一等書記官兼任ラングーン總領事に任ぜられ昭和二十年（一九四五年）四月下旬日本軍及在留日本人がラングーンを撤退するに至る迄ラングーンに勤務した、此の期間に於ける私の主たる職務は大使館書記官としてビルマ國外務省と連繫をとり總領事としてビルマ在留日本人の權益を保護することにあつた

二木村兵太郎陸軍大將は昭和十九年（一九四四年）九月中旬ビルマ方面軍司令官として着任したが同大將は日緬間の融和親善意思の疏通民生の安定に非常の關心を拂ひ屢々緬甸要人と會見し腹藏なき意見の交換を遂げ私も此の種の會合に陪席し其の實狀をよく承知してゐる

三以上の具体的事例としては昭和十九年（一九四四年）十一月十八日廿日及廿二日の三回に亘り同大將がビルマ政府各大臣及最高法院長